

第53回 中高校生の吃音のつどい(演劇レッスン)

11月13日(日)、小学生11人、中学生2人、高校生8人、兄弟姉妹4人、ご両親16人、スタッフ35人の計76名が参加。東京都千代田区立千代田小学校ことばの教室にて開催。午前は谷川俊太郎さんのユーモアたっぷりの詩「きりなしうた」などを使つての朗読劇。午後はどもることについてのグループごとの話し合い。(リーダー;海老原亮平、大戸彩、岡奈々子)

M.Kさん(高2)

正直、私はあまり演劇が好きではなかったのですが、私が思つてた演劇とは違つてとても面白かったです♪Yちゃんと「おならうた」をやった時は小学生に戻つた気分でした楽しかったけど…少し恥ずかしかったなー(笑)

話し合いでは、いつもいろんな意見が聞けてお陰様で昔はネガティブだった私が今では少しずつポジティブになってきているような気がします^^毎回参加して良かったな〜って思っています^^♪

おならうた

作・谷川俊太郎

いもくって ぶ
くりくって ぼ
すかして へ
ごめんよ ば

おふろで ぼ
こっそり す
あわてて ぷ
ふたりで びよ

Y.Iさん(小2)

お尻振ったりしてちょっと恥ずかしかった。でもやって楽しかったです。また今度もやりたいです(談)。

川口 亮太(スタッフ)

はっきり言って、やりたくない。これが今回の演劇に対する僕の第一印象でした。別にどもるのが

嫌とかそういうのではなくて、ただ単に恥ずかしい、自分には向いてない、なんで大学生にもなってこんなことやらなきゃいけないんだ、というのが正直な気持ちでした。

そんな気持ちでしたが、やると決まつた以上はやるしかない、どうせやるなら思いっきりやろうと割り切ることにしました。するとやっていくうちに色々なアイデアが思いつき、演技の中で『自分らしさ』を出すことができて段々と演劇が楽しくなってきました。何事も、全力で取り組めば何かが変わるんだなあと思いました。11月でやった演劇は今では僕の誇りの一つです。

あの時、やりたくない、と切り捨てたままではこのような気持ちにはなっていなかったと思います。考え方を少し変えるだけで新しい世界が見えてくるということを改めて実感しました。考え方を変えれば世界が大きく変わる、これは何事においても当てはまると思います。

もちろん吃音についてもそうだと思います。確かに僕は吃音者だから他人に比べてしゃべるのが不得意かもしれません。でもそれだけじゃないはずです。吃音者である自分だからこその分かること、できることというものが絶対あるはずです。そう思うだけで吃音者である自分に自信が持てるような気がします。考え方で世界が変わるならば、ポジティブに生きていこう。そう思った11月のつどいでした。

塩谷 絵里（国立リハビリテーション学院 2 年）

午前中の詩の朗読劇、そして午後の話し合いを通して、多くの方々と交流することができ、楽しく、意義深い時間が過ごせました。全体を通して、みんなが素直な感情や様々な本音を表ししやすいような、暖かい雰囲気があったことが印象的でした。一般的にプラスとされるものでもマイナスとされるものでも、一つ一つの感情が尊重され、それを表現することが大切にされ、皆さんが心を開く準備ができていて、同時に、誰かの気持ちを受け止める準備もできているようなイメージです。

ある保護者の方が、お子さんについて、いつもは集団の中で隅っこににいるのに、ここでは溶け込んでいると驚いておられ、そんなお子さんの姿を喜んでいらっしやるのが感じられました。保護者の方にとって、保護者同士の間で日頃の悩み

を共有する、ということだけでなく、伸び伸びしたお子さんの様子を見られるという点も、つどいのメリットなのだと、気付きました。

話し合いは、**高校生グループ**に参加させていただきました。**どもりカルタ**（JSP）を使いながら、高校生の方々が経験している吃音にまつわる出来事とそれについての気持ちを話し合いました。高校という集団生活において自分が所属するグループでの自分の役回り、といったことと吃音が絡んでいて、周りの“空気”に合わせる中でご自分の繊細な気持ちを抑え、そこで生じる葛藤に悩んでおられて、年代独特の悩みがあるのだなど、改めて、感じました。また、それぞれのお話に対して、スタッフの方が、冷静な目で状況を判断しコメントしたり、その後の大学生活や社会人生活経験を踏まえたより広い

視点から、アドバイスをしたりしていて、良い場だなと感じました。吃音をきっかけに様々なつながりができていて、普段、自分の生活圏内での交友関係に留まりがちな私から見て、とても新鮮な光景でした。

けんかならこい 作・谷川俊太郎

けんかならこい	はだかでこい
はだかでくるのが	こわいなら
てんぷらなべを	かぶってこい
ちんぼこじゃまなら	にぎってこい



どもりカルタ「プロポーズ 吃って言うのが いいみたい」を読んで…

吃りがある人が吃って話している時、それは偽らない自然な姿で話していると考えていいのではないのでしょうか。そんな正直な姿で、一生懸命伝えられる思いは、相手にしっかり届くということだと感じました。

私がこんな風に感じるのは、吃音と方言を重ね合わせて考えるからです。私は出身が兵庫県で、関西の方言があります。しかし、こちらでは、標準語を話すようにします。そして思うのは、**標準語で気持ちを表現しようとするのは、思いが強ければ強いほど、難しいなこと**ということです。言葉を考えるステップを踏むことで、思いの新鮮さや強さがなくなる感じがします。もって生まれた言葉（＝吃音でも

方言でも！)の方が、思いをストレートに表現しやすく、相手にもっと伝わるのでは、と感じます。

猪又 俊明 (スタッフ)

演劇では当日最初のデモンストレーションを傍から拝見していて、非常に楽しそうで当日までのミーティングに参加しなかったことを後悔しました。皆さんがそれぞれ担当されている演劇では小中高生を楽しませようとする工夫がされており、熱がこもっていてとても上手でした。

自分も練習をしてしっかりとした演劇をしてみたかったです。この演劇のコンセプトは声を出すことを楽しむことだと思いますが、これは本当に大事なことです。吃音者として話すことに不便がある以上、話すことが嫌になってしまうこともあると思いますし、実際自分も感情をコントロールできていない時には、話すことに嫌気がさしてしまうことがあります。ましてや小学生などの若い頃から話すことが嫌になったり、恐怖を感じたりしてしまうのは本当にもったいないことだと思います。話すということはそれほど楽しいことだし、大声を出すことはもつと気持ちのよいことなので、吃音に囚われず声を出すことを楽しむことを経験するには演劇は非常に効果的だと思いました。当日の子供達の中には演劇を恥ずかしがっている子もいたようですが、ほとんどの子が積極的に参加し、のびのびとやっていたを見て楽しかったです。

後半の話し合いでは小学生の高学年グループに参加させていただきました。とても活発な男の子達が集まったので、話し合い中でもじゃれ合ったりしてなかなか話し合いが順調には進まなかったのですが、話す時にはまじめな意見を述べていて、小学生とは思えないほどしっかりした考えが数多く非常に感心させられました。自分は今思えば小学生の頃から吃音の症状はあったのですが、いつか普通に治るだろうと思っており全く悩むことはありませんでした。自分が吃音だと知った高校生の頃からは常に吃音のことで悩んでいて、何事に対しても非常に消極的になってしまい、大学3



年の今でも消極的なことが多いです。しかし、小学生の彼らは吃音に悩み、友達にからかわ

れることもあるようですが、吃音に対して前向きでした。話すことが仕事の放送委員になった子や、吃っても逃げずに自分の言いたいことは最後まで言うようにしているという子がおり、そんな彼らを頼もしく思ったのと同時に、吃音から逃げ続けてきた自分を情けなく感じました。そして、彼らも頑張っているのだから自分も頑張ろうと思うことができました。後半の話し合いの時間では得るものがとても多かったです。

小学生の1人が「今日は吃音が自分だけじゃないから楽しい」と言っている子がいました。自分も言友会で同じ吃音で悩む人と会うようになってからは吃音への抵抗感が少なくなりましたが、それと同じように子供達も集いの場が安らぎの場でもあり、集いの存在意義の大きさを感じました。自分はスタッフとしての役割は正直そんなに果たせず、逆に子供達からいろいろなものを与えられるばかりでした。今後も集いには参加させていただきたいと思いますし、スタッフとして、与えられるだけでなく、ギブアンドテイクの関係を築いていけるように成長していきたいと思います。

いるか 作・谷川俊太郎

いるか
いないか
いないか
いつならいるか
よるならいるか
またきてみるか

村島 友里絵（スタッフ・千葉言友会）

演劇という今までできなかった体験や、いろいろな方と出会うことができとても充実した時間を過ごすことができました。そして、その人自身が持つ吃音に対する考えをたくさん知ることが出来ました。その中には同感できることや、考えもしなかったことがありとても勉強になりました。

つどいの初めに行ったからだの揺らし(竹内レッスン)では、高校1年生のY. Uちゃんとペアを組みました。初対面でお互いに緊張していたため、会話をして打ち解けようと話しかけてみたところ、私と同じ吹奏楽部に入っていたことが分かりました。しかも、担当していた楽器も同じ(サキソフォーン)ということでとても親近感が湧き、少しずつ打ち解けることができました。Yちゃんは今のところ高校生活における吃音の悩みは無いと話していました。それに比べ、私の高校時代は悩みばかりで気持ちを分かってくれる人もいなかったため、いつも吃音を後ろ向きに考えていました。しかし、Yちゃんは話をする時吃っていても、にこにこ楽しそうに話すので、吃音を前向きに捕えているのだな、と心から感じました。

午後の話し合いは、高校生グループに参加しました。高校生の中には、大学受験を目前に控える高校3年生の女の子、学校で演劇部に入っている女の子などがいました。高校3年生の女の子はこれから始まる大学生活に不安を抱いていて、サークルに入りたいと思っているけれど自己紹介などがあると思うと不安になると話していました。私も高校生の時は大学生活が不安で、高校と大学では何から何まで違うためイメージが湧き辛かったです。なので、大学がどういうところかを知っている私が、もっと積極的に発言すれば良かったなと思いました。

今回初めて参加して感じたことは、子供達がみんないきいきとしていたことでした。とても吃音という重い悩みを抱えているようには見えず、笑顔が絶えないことが印象的でした。しかし、それは同じ悩みを抱える仲間が集まる中高校生のつどいだからであって、普段の学校などでは見せない姿であるかもしれませんが、ありのままの自分を出せる中高

校生のつどいは子供達にとってとても良い場所だと思いました。また、同じ悩みを持つ「お兄さん」「お姉さん」であるつどいのスタッフから、吃音に関する体験談が聞けることや、悩みを相談できることも良いところだと思いました。今回参加していた子供達を見ていると、私も子供の頃に、つどいのスタッフのような心強い存在がいてくれたらなと思い、とても羨ましく感じました。

南 めぐみ（小平市あおぞら福祉センター・障害者福祉センターST）

佐藤さんから「ぜひ来てよ」と一言軽く言われたのが、夏の「吃音を語る会」でした。その後、メールで案内をいただいたのですが、参加の連絡をしないままになってしまいました。慌てて申し込んだのが、集いの3日前くらいでした。直前の申し込みだったにもかかわらず、快く受け入れていただき、ありがとうございました。

自分は、吃音がありますが、成人するにつれてほとんど良くなり、日常的には「電話をかける時、たまに困ることがある」という状態です。自分の吃音に興味を持ったのがきっかけで、現在は言語聴覚士として、子供達の「ことばの先生」をしています。職場にも、吃音で困っているお子さんがいるので、中高校生の集いがどんな活動をしているのか知っておきたいと思ったのが参加の動機です。職場の他の言語の先生からも「どんな会なのか、後で教えてほしい」と頼まれていました。

当日は、●飛び入りに近い参加だったにもかかわらず、プログラムに合わせて主体的に参加できて楽しかった。●スタッフが頑張って運営をしていることに感動した。●いろんな人達と話が出来た。●自分自身の吃音について改めて気がついたり思い出すことがあった。などなど、良い刺激を受けて元気をもらうことが出来ました。あるお母さんが「治療機関では、子供の相談はしてくれるけど、親側のケアはしてくれない。つどいでは、親も力をもらえるのがいい」「大きなお兄さん、お姉さん達が、司会でしっかりやっていてかっこいいところを子供に見せたい」と話していました。本当にその通りで

すね。

吃音のことを話せる場、話せる仲間がいることを、これから会う吃音のお子さん・お母さん達に、自信を持って伝えていきたいと思います。

私も、これからもぜひ仲間の一人に加えさせていただけたら、うれしいなあと思います。また、よろしくお願いします m(_ _)m。

後記「演劇のすすめ」

・無理だろう…やめておこうと頭で考える自分がいる。それに対して、でもやれば楽しいかも…本当はやってみたいかも…とささやく自分もいる。気を付けて耳を澄ましていないと分からないくらいの小声で。そんな場合、どうするか？どちらの言ってる言葉が正しいのか？

・実は、ささやき声の方が正しいというのが、私のこれまで生きて来ての実感です。Stigma の影響を受け続けた頭ではなく、そうしたい…とささやくからだの声の方が。

・うまくいくかどうか？などは、まずやってみてから、考えても(悩んでも)良い。やってみてから止めると言う選択肢も可能で、そもそもやってみないと分からない。

・今回も竹内レッスンのからだの揺らしを行いました。これは、声を出す際のからだのこわばりに自ら気付くためのもの。揺らしてもらっている際、如何に、自分のからだが固まってしまっているのか？からだが相手に無意識の内に無理して合わせてしまっているのか？そんなことに気付き、そしてまた声を出してみる。自分らしい声をさぐりながら、伸び伸びと自分でも気持ち良い声を出していく。

・演劇と聞いただけでやめた方も、いらっしゃいましたが、今秋はぜひ来てください。K君(高3)の朗々と響き渡る声、今回も良かった。(たかはる)